

14. (N) 血液・骨髄・リンパ系

(480-487)

このセッションには、多数の方が参加され、熱心な討議が行われ、誠に心強く感じた。

480席は鉄欠乏、合併症のある鉄欠乏および潜在性鉄欠乏における鉄の吸収率を測定し、その相異を検討した。吸収率は上記の順に高値で、吸収率の測定は鉄欠乏の程度の診断に重要であるとのことであった。

^{111}In -oxine, tropolone による血小板標識法が確立されてから、種々の疾患における血小板動態の検索が盛んになってきた。481席はITPにおける血小板寿命と各種障害赤血球クリアランスの関係を検討し、熱処理赤血球のクリアランスと血小板寿命は相関関係があるが、NEM処理、抗D血清処理赤血球クリアランスとは相関がない。ステロイド投与、 γ グロブリン投与によるITP血小板寿命の延長とともに障害赤血球クリアランスも延長した。両者におけるFc受容体との親和性の強弱、その他の相互関係を示唆する所見として興味深い。

482席は種々の巨大脾腫における血小板動態で、共通所見は回収率の著明低下、正常寿命、脾におけるプーリングであるが、血小板産生能の高低によって交替率が異なることを明らかに示した。心腔内血栓のワーファリン療法時の血小板集積の低下を483席は示した。同療法下の血小板機能について、さらに検討の必要があろう。骨髄シンチグラフィは造血巣の分布を知る唯一の手段として貴重である。

484席は $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -コロイド法でMDSについて骨髄分布を定量的に観察し、白血病への移行過程で漸次分布が拡大することを示した。 ^{111}In -chlorideによるシンチグラフィを485席では再不貧症例に行い、骨髄像を得られぬ症例は重症であることを示し、486席は再不貧、骨髄線維症で骨髄描出不良を認めた。 ^{111}In -chlorideのシンチグラフィは実用性にすぐれているので、今後の発展を期待したい。487席は ^{201}Tl の骨髄、骨への集積を検討し、その有用性を考察した。血液核医学の検索につき、新たに多くの施設が加わって、貴重な発言を行い討論されたことは、心強い限りである。

(刈米重夫)

(488-491)

リンパ系の核医学検査にはリンパ流の動態解析や、リンパ管およびリンパ節の描出などがあり、脾の核医学的検査には脾機能動態の解析や脾像の描出などが行われている。

488: 三重大放の豊田らは、Tc-99m-熱処理RBCにより自家移植脾の描出を行い、移植の成否の判定を行っている。移植後の時間の経過とともにTc-RBCの摂取が良くなるという。脾機能についての認識も深くなりつつあり、今後の発展が期待される。

489: 東邦大三内の武安らは、下肢のリンパ流に対する温熱の影響をしらべ、加温によりリンパ流が活発になること、比較的低い温度で効果があることを報告した。下肢表面および2cm深部の温度をテルモの装置で測定していた。NMR法での測定は如何であろうか。浮腫の治療効果が期待される。

490: 近畿大一外の佐伯らは、乳癌における局所リンパ動態をTc-99m-HSAでしらべている。Metaの有無の検査として流路と流速を参考にしている。初期の変化をどの程度確実にとらえ得るかが要点であろう。術前検査として定着するよう期待される。

491: 大分医大放の加藤らは、Tc-99m-レニウムコロイドを食道粘膜下に注入し、リンパ節シンチをとり、摘出したリンパ節の組織をしらべ、CT像とも比較した。偽陽性率も高いが、CTとの併用で正診率が向上するという。Sinus histiocytosisの所見とシンチ描出との関連は興味ある所見である。CT以外の方法との併用も検討課題と思う。

(斎藤 宏)